

尾畑留美子様のプロフィール(尾畑酒造ホームページから抜粋)

「真野鶴」五代目蔵元。

1965 年、佐渡の「真野鶴」蔵元の二女として生まれる。佐渡高校、慶応大学法学部卒業。大学卒業後は、映画業界を経て 1995 年帰郷し実家の蔵を継ぐ。現在、尾畑酒造・専務取締役。

2014 年から佐渡の廃校を仕込み蔵として再生させた「学校蔵プロジェクト」をスタート

2017 年 12 月 NHK ワールド「Direct Talk」に出演

2019 年 12 月 新潟女性活躍アワードを受賞

2020 年 9 月、the Japan Times 「Satoyama award」の大賞を受賞

きき酒マイスター（公益財団法人日本醸造協会主催）

【WSET SAKE level 3】

- 著書『学校蔵の特別授業～佐渡から考える島国ニッポンの未来』（2015 年/日経 B P 社）



旧西三川小学校の校舎を利用した「学校蔵」の取組についての想い

私の主人が佐渡市 PTA 連合会の取組で、これから数年の間に廃校になるという佐渡市内のすべての学校を回るという仕事の中で西三川小学校に巡り会った。主人が「とても美しい学校で、無くなってしまうのはもったいない。西三川小学校での酒造りを考えている。」という言葉に、内心難しいのでは？と想いつつも行ってみた。



丘の上から見る学校は「日本で一番夕日がきれいな小学校」と謳われた校舎で、地域の人々の思いがこもった場所だと感じ取れた。この学校を残したいという想いに駆られ、「学校蔵」のプロジェクトがスタートした。

実際に動き出すと、免許のことなどクリアしなければならないことが多く簡単ではなかった。

廃校になった翌年 2011 年に東日本大震災があり、マーケットも不安定となり、少し遅れて 2014 年のスタートとなった。酒仕込みの場所は改装したが、外観含めて内部もなるべく学校らしさを活かしていきたいと考えている。

学校蔵運営の4つ柱、「酒造り」「学び」「共生」「交流」について

冬場は本社で酒造りをしているため、夏場（5 月下旬から 9 月）に学校蔵で酒造りをしている。酒造りにはオール佐渡産をコンセプトに、佐渡産のお米を使う他、酒造りのエネルギーも太陽光パネルを用いて再生エネルギーを取り入れている。酒造りを通して佐渡島

の環境を見える化し、自然環境との「共生」というメッセージを届けるためだ。

様々な企業や組織、高校、大学等とのコラボレーションワークショップを実施。特に、毎年6月に開催している「学校蔵の特別授業」では多くの参加者が集う。2019年は、講師に藻谷浩介さん（日本総合研究所調査部主席研究員）、玄田有史さん（東京大学社会科学研究所教授）、出口治明さん（立命館アジア太平洋大学学長）らを迎え、島内外から120名ほどが参加して、「佐渡島から考える、人が減っても出来ること」をテーマに実施した。課題先進国である佐渡は課題もいっぱいあるけれども、逆に言うと、課題解決の機会もいっぱいある。佐渡だからこそそのポジショニングでいろいろなことを考え、解決のヒントを探ることができれば、大きな島国である日本の未来にも役に立つのではないかと考えている。

学校蔵の授業で大切なことは多様性で、高校生、農家、上場企業、留学生、大学教授等々、年代も10代から70代までいろいろな方が一緒に学んでいる。懐かしい教室に入ると、皆さんが「立場という鎧」を脱ぎすてフラットな生徒の立場になる。

世代の違いで、それぞれの考えが違うこともあるが、考えの違いこそが化学反応を起こすタネである。その時に、自分の経験知の中でもややもやしていたものが言語化されていくということが起こると思う。そういうハッとする瞬間を得られるというのが、授業のいいところだと思っている。

何かの気づきがあれば、アクションが変わり、アクションが変われば、明日が変わる。明日が変われば、未来が変わる。未来を変える特別授業になっていけばいいなあと思っている。



今、地方が消滅するという問題について

人口が減っているのは地方だけでなく、国全体の問題でもある。人口減少という憂いが日本全国を覆っているのは間違いではないと思うが、実際にはそう簡単に消滅することはないと思う。

江戸時代などは日本の人口はもっと少なかった。最適な人口がどのくらいかということとは誰にも答えられない。例えば、水が半分になった時に、「もう半分しか無い」と思うか「まだ半分ある」と思うか、の違いでもある。人口減少を過度に怖がらずに視点を変えるということが大事だと思う。

人が減るということに関しても、表と裏の考え方がある。「資本としての人」と考えるとマイナスだろう。人が減ると組織が回らなくなり、ものを買う人も減り、消費が滞ってマーケットが縮小していく。

資本ではなく「資源としての人」と考えると、ものごとが違うように見えてくる。人が減ると個人の役割が増えてくるので、やり甲斐が出てきて、人間らしい生活、豊かな暮らしにスポットが当たるようになる。



人口減少をどう考えるかという意味では、今は「資源としての人」という考え方が広がって来ているように思う。特に、コロナ禍では、リモートワーク等が増えるにつれて、会社視点から、社会視点になる。自分と家族のあり方、街の在り方などに触れる機会が増える。

地方のあり方という意味では、昨年の学校蔵のテーマを「人が減ってもできること」として、人というものを資本ではなく、資源であるということを出発点にして考えた。そうすることで、物の見方が変わってくるだろう。

コロナ禍以降に明白になっているのは、グローバルな大量生産や大量消費からの脱却だ。平均化した同じものがたくさん入手出来ることが生活の善である段階は過ぎた。小さくとも、思い入れの強い物、特別にオリジナルな物、誰かに必要な物という物に価値が出てくると思う。そういった物をいかに生み出すかという考え方になっていくと思う。少なくとも、そう考える人が増えていくと思う。

探究的で創造的な学習への転換について

学校現場では課題解決型の探究的で創造的な学習への転換が求められているが、課題というのは実社会の中でどんどん変わっていくので、生徒たちに届く時点ですでにタイムラグを生じてしまうというリスクもある。例えば、あの時はマスクが必要だったけれども、配られた時は状況が改善して皆が持っていましたというのに似ている。

もう一つは、作っている側の課題と実際に現場にいる人との課題にずれがある場合もある。例えば、東京にいる人が地方の課題はこれだよと言っても、住んでいる人たちにとって、それは全然課題ではないよということもある。

探究的で創造的な学習が必要だと言われているが、そのためにはどうしたら良いかというと、一つの方法は用意された課題ではなく、自分で課題を見つけていくということが大事。自分が興味があることでないと、探究的に創造的になんてできないと思う。誰にとっても見えているわかりやすい社会課題ではなく、もっと地域的な個人的な感覚からの視点を磨くことが必要。

それらを引き出すために、質問の仕方を変えるのも一つの方法。君にとって、「この街で変えたいものは何？」とか「この一週間で街中で困ったことって何？」とか、子供たちにとって一番興味のあるものを引き出す質問に変えることによって、大人もびっくりな探究的で創造的な学習能力を子供たちが発揮するのではないかと思ったりもしている。学校でもらう宿題というのは、こなすもので、大抵楽しくはない。課題解決力を伸ばすには質問力の向上が大事である。先生の質問力もだけれど、子供たちが自分自身に問いかける質問力を磨くきっかけになると良い。

今は親もリモートなどで家にいる機会が多いので、コロナって何なんだろうと家族で考えるいい機会かもしれない。人間はいつかは死ぬけれども、最後の最後までコロナでびくびくするのは嫌だと思う、そういう世の中にしないようにするためにはどうしたらよいか、と子供に聞いてみるとよい。

もう、いいかげん「コロナのせいで」というのはやめようと思う。やらなければいけないことは、コロナがあってもなくてもやらなければならない。ニュースの中に答えがあるわけではなく、答えはいつでも自分の中にある。正しく恐れて、自分の中にある答えを見つけようという姿勢が大切だと思う。

学校へのメッセージを一言

今まで効率、生産性を追い求めてきた成長の時代であった。しかし、日本酒は効率化や生産性だけでは生まれない価値を生むものだ。学校も同じだと思う。そして、日本酒も学校もブランドを持っていると思う。ブランドとは、歴史、品質、信頼、様々あるが、もう一つ欠かせないのは、そこに期待を寄せる人達に支えられているということだ。学校は地域に期待され、地域から応援されている。だからこそ、いつまでも残って欲しい場所である。そんな学校で学ぶ子供達には、様々な経験をしてほしい。その経験が道を拓く。「答えはいつも自分の中にある」。

かな。

- ・訪問日 令和2年8月1日（土）
- ・インタビューアー 新潟教育会 代表理事 濱中 力也

尾畑留美子様を講師に迎えての夏期大学講座は下記のように延期となりました。

＊令和2年8月1日（日） 新型コロナ禍の状況に鑑み中止

＊令和3年7月31日（土）・・・・・・実施の予定、どうぞお楽しみに